



睡眠薬の処方に対する医師の態度：アンケート調査

ベンゾジアゼピン受容体作動薬は安全性に関する懸念があるにも関わらず、今なお世界中で広く処方されています。近年、安全性の高い新規睡眠薬が次々と発売され、これらが医師の睡眠薬の処方針動に対して影響を及ぼしている可能性があります、これまで調査されていませんでした。

秋田大学精神科学講座の竹島正浩講師、三島和夫教授、琉球大学精神病態医学講座の高江洲義和准教授、聖路加国際大学大学院看護学研究科の青木裕見助教、聖マリアンナ医科大学総合診療内科の家研也准教授、杏林大学医学部精神神経科学教室の渡邊衡一郎教授、坪井貴嗣准教授、北里大学医学部精神科学の稲田健教授、かつもとメンタルクリニックの勝元榮一医師、宗像水光会総合病院の津留英智医師、日本医療福祉生協連合会家庭医療学開発センターの喜瀬守人医師らの共同研究グループは、日本プライマリ・ケア連合学会、全日本病院協会、日本精神神経科診療所協会に所属している医師 962 名に対してアンケート調査を行い、頻回に処方する睡眠薬のクラスと、その理由について調査しました。

その結果、各クラスの睡眠薬について頻回に処方していると回答した医師はオレキシン受容体拮抗薬が最多で 84.3%、ついで非ベンゾジアゼピン系睡眠薬の 75.4%、メラトニン受容体作動薬の 57.1%、ベンゾジアゼピン系睡眠薬の 54.3%でした。頻回に処方する睡眠薬のクラスと理由に関して、オレキシン受容体拮抗薬を頻回に処方していると回答した医師はそうではない医師と比べて、有効性と安全性を重視していました。メラトニン受容体作動薬を頻回に処方していると回答した医師はそうではないと回答した医師と比べ、安全性を重視していました。また、非ベンゾジアゼピン系睡眠薬を頻回に処方していると回答した医師はそうではないと回答した医師と比べ、有効性を重視していましたが、安全性については有意差がありませんでした。ベンゾジアゼピン系睡眠薬を頻回に処方していると回答した医師はそうではないと回答した医師と比べ、有効性を重視していましたが、安全性を重視しないことと関連していませんでした。

本研究はほとんどの医師がオレキシン受容体拮抗薬を有効かつ安全性が高い薬剤と考えていることを示しました。また、ベンゾジアゼピン系睡眠薬や非ベンゾジアゼピン系睡眠薬については、医師は安全性に関する懸念を理解しながらも有効性を期待してやむを得ず処方している可能性が本研究より示唆されました。今後、有効性と安全性が確立された不眠症に対する認知行動療法が広く普及するとともに、安全性の高い新規催眠薬が効果を示さなかった患者の治療ストラテジーに関するエビデンスが蓄積されることが期待されます。

本研究は、科学雑誌『Frontiers in Psychiatry』に 2023 年 1 月 31 日に受理されました。

【問い合わせ先】

(研究内容)

秋田大学大学院医学系研究科 精神科学講座

講師 竹島正浩

電話：018-884-1111

Email：m.takeshima@med.akita-u.ac.jp

(その他)

秋田大学医学系研究科・医学部総務課長

飯塚 博幸

電話：018-884-6005 / FAX：018-884-8619

Email：iizuka@jimu.akita-u.ac.jp